

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリオン 新劇場版 Q

その5

今回のテーマ

耐え難い現実 贖罪の念に耐えきれず否認する心

前回のおさらい

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わった。しかしシンジの起こした行動は、それはシンジが綾波の喪失を受け入れられず、躁的な心性によって起こしたものだと考えられる。その幸福な世界は幻想であり、その中で排出された悲哀は必ずふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される。

エヴァではシンジが綾波と一体になる幻想を抱いた一方で、それによって起きたニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる。またシン

ジ自身の心も、今回のエヴァ Q において、これまで排出してきた相次ぐ喪失（これは思春期の喪失の感情でもある）という心の痛み、悲哀が再び回帰し、現実直面し、苦悩し、もがきいていくことになる。

一般的に現実起きた苦悩や悲哀を受け入れていくには、自身の持つ愛の中にいかに収めていくかということが大切である。そのなかで徐々に「こころの痛み」を受け入れていく。

それにはシンジを取り巻く人々がシンジの思い（苦悩）を受け止めていく対象であり環境が必要不可欠である。

しかし暴走してしまったシンジはニアサードインパクトを起こし、周囲を非常に苦しめてしまった。それゆえシンジに対して彼を取り巻く人々は怯えと憎しみ、怒りの感情を抱いている。Q の冒頭部ではヴィレの人々は負の感情に満ちて誰もシンジに関わろうとしない様子が描かれている

そして死んだと思ったアスカに再会しシンジは喜んだのも束の間、アスカも強い怒りを感じており、ヴィレ内ではシンジの心をきちんと受け止める対象も

環境も内容に描かれている。

そのなかでシンジ自身は、周囲に対して強い迫害感を感じ、良い対象を求めて、綾波の声に従い、綾波が操縦する 0 号機にシンジが乗り込む。

飛び立った後にアスカが言った言葉が非常に印象的である。

アスカ「ふん、あれじゃあ、バカじゃなく……ガキね」

これはシンジがシンジ・綾波の二者関係への退行してしまったことに対する発言と共に 3 者から関係からアスカが弾き出されたことへの妬みでもある様に感じられる。

3. NERV に戻ったシンジはどうなったのか？

NERV 本部に戻り、綾波に会いに行ったシンジだが、思いを受け止め、返答する感じはない。ここでの綾波はシンジの心を受け止める（コンテインする）器

になっておらず、綾波が全く空っぽの様な存在になっている。

破で、命かけて救い出したと感じた綾波と全く会話にならないことに、シンジは強い衝撃を受け、ヴィレだけでなく、ここでもシンジ自身を受け止め、理解してくれる存在はいないと感じたと考えられる。

それ故にこれまで言われてきたシンジの存在を否定する言葉が何度も思い出される。

「何もしないで」とミサトが言う。

「あんたには関係ない」とアスカが見下ろす。

「エヴァにだけは乗らんでくださいよ」とサクラが叫ぶ。

「エヴァに乗れ」とゲンドウが言う。

「知らない」とレイが言う。

自分を守る、良い対象のなくなったシンジは周囲の言葉を全て被害的に捉え、その言葉に混乱し、苦悩しているように感じられる。

4. 渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

この Q では、今まで親しい存在だと感じていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波も自分を守ってくれる良い対象にならなくなっていると感じているシンジは、支えを失い、孤独を感じていたと感じられる。そのなか、渚が彼をピアノの連弾に誘い出す。

カヲルが弾くピアノにぎこちない感じで入っていたシンジだが、徐々に水を得た魚のようにイキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

二人は連弾をしながら会話を交わしている。それは Q では見られなかった会話らしい会話をしている。それは対等な立場で情緒的に交流していることを意味する。

この会話の中でカヲルは「音が楽しい。二人ってすごいね」と言っているが、このピアノの連弾を通じて、カヲルはシンジに外界で人と深く情緒的に関わること（それがアンサンブルだと考える）が非常にイキイキとした彩りを持つものなのだという身を身をもってシンジに体験させている。

そしてシンジが「うまく弾く」コツを尋ねたときにカヲルは「気持ちのいい音をだせばいい」と言っている。そこでは、なにか周囲に対してうまく振る舞う必要はないと言っており、そのことに加えて、自分自身が心地の良いと感じられることに目を向けていくことの大切さを伝えている

カヲルは連弾で関わることに喜びと一緒に考えながら、他者とより深い喜びを得られるには何が大切か？ということを伝えている様にも感じられる。ある意味、カヲルはシンジの思いを受け止め、自由に創造的に他者と関わること（社会・現実世界と関わること）を促している様に感じられる。

3) シンジが現実を知ること。

～妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行することの辛さ～

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、その中で偶々支給されてきたシャツに鈴原トウジ書かれたタグをみて、シンジは衝

撃を受ける。そして自身が長い間現実から隔絶されていたことを痛感し、怖くなり、現実に向き合おうとする覚悟を決めたと考えられる。シンジがきっかけとなって起こったものだとカヲルに静かに伝えられる。

そのことにシンジは強いショックを受け必死に否認する。シンジ自身とにか
く第 10 使徒に飲み込まれてしまった綾波の喪失を受け入れられず、彼女を助け
出そうと必死になっていただけなのに、なぜ自分がこんなことをしでかし、これ
に対する罪を背負わなければならないのか？と感じたと思われる。

しかしそのシンジの感じていることこそが、綾波の喪失の否認に基づき起こ
した躁的行動の代償であり、排出された悲哀が必ずふたたび心に回帰して抑う
つの苦しみとしてシンジに迫ってきている瞬間であると考えられる。

しかしその惨状があまりにも酷いためにシンジの心は現実を受け止めきれず、
否認し、再び殻に閉じこもろうとする。

この心性は妄想分裂ポジションにあったシンジがカヲルによって受け止めら
れる中で現実を知るが、自身が起こした攻撃性を受け止めきれず、（本来であれ
ば、乳児で言えば、「乳房」（母親）が傷ついてしまったのではないか？という自

責感や罪責感という抑うつ的な心の痛みを感じ、抑うつポジションへと向かっていく)抑うつポジションに向かわず、妄想分裂ポジションに回帰してしまっている。「罪だなんて……何もしてないよ！僕は関係ないよ！！」という言葉が、そのシンジの心を如実に表している。

カヲル「ただ、償えない罪はない。希望は残っているよ。どんな時にもね」と重みのある言葉を言うが、この言葉はカヲルが「破」の最後に言った「今度こそ君だけは、幸せにしてみせるよ」という言葉に呼応している様にも感じられる。

このカヲルが言った言葉は、さまざまな喪失を受け入れ、現実世界(外的世界)に向き合い、妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行は必ずできると、そしてそれがピアノの連弾のようにイキイキと彩りのある世界のように感じられ、シンジに幸せをもたらすとカヲルは言っている様に感じられる。

→その後冬月からシンジの母ユイ、そして綾波の真実を伝えられ、その後綾波に会うが、綾波は助けていなかったことを知り、シンジは絶望の底に突き落とされ

た様な感覚になったものと考えられる。

4) 現実を受け入れられず苦悩するシンジにカヲルはどの様に関わっていったのか？

現実を受け入れられずに苦悩し続けるシンジ。そこにカヲルが現れ、シンジと一緒にエヴァに乗ることを提案する

シンジ「いやだ！エヴァなんかもう乗りたくない！綾波を助けてなかったんだ！」

シンジは部屋の壁に頭を打ち付けた。

シンジ「エヴァに乗ったっていいことなかなかったんだ！もういやだ！何もしたくない！！」

カヲル「そうして、つらい感情の記憶ばかりをリフレインさせてもいいことは何も生まれない」

カヲルは床に転がっていた音楽プレイヤーを取り上げる。

シンジ「いいことなんかないよ……渚君が見せたんじゃないか……あの真っ赤な、どうしようもない世界」

カヲル「エヴァで変わったことはエヴァで再び変えてしまえばいい」 シンジは壁に頭をもたげたまま、絞り出すような声で苦悩する。

シンジ「そんなこと言ったって、エヴァも父さんもミサトさんも、何もかも信じられないよ！」

カヲル「でも、僕は信じてほしい」

シンジ「できないよっ……ミサトさんたちが僕にこれを付けたんだ……もうエヴァには乗るなって。乗ったら死ぬって脅されて……」

シンジ「もう……エヴァなんかどうでもいいんだ……」

無言のまま、カヲルの手がそっとシンジの首に掛かる。シンジは驚いて言葉を失ってしまう。カヲルはシンジの首に巻かれていたチョーカーのロックを外して、それを自分の首へと移し替えてしまう。

カヲル「分かっている。リリンの呪いとエヴァの覚醒リスクは僕が引き受けるよ」

シンジ「渚君……」

カヲル「気にしなくていいよ。元々は僕を恐れたリリンが作ったものだからね。

いずれはこうするつもりだったんだ」

カヲル「碇シンジ君。君の希望はドグマの爆心地に残る二本の槍だけだ」

音楽プレイヤーを挟んで、カヲルはシンジの隣へ腰を下ろして語る。

カヲル「それが補完計画発動のキーとなっている。僕らでその槍を手に入ればい

い。そうすればネルフもフォースインパクトを起こせなくなるし、第 13 号機と

セットで使えば、世界の修復も可能だ」

シンジ「そうだね……うん、君になら出来るよ」

カヲル「君となら、だよ。エヴァ第 13 号機はダブルエントリーシステムなんだ。

二人でリリンの希望となろう。今の君に必要なことは何よりも希望。そして贖罪

と心の余裕だからね」

(中略)

カヲル「ピアノと同じだ。二人一緒ならいいことがあるよ。シンジ君」

シンジ「行こう。カヲル君」

【考察】

自分の起こしたニアサードインパクトのあまりの惨状、そのことに加え、冬月によって伝えられた綾波への真実から、より周囲に対して迫害感を感じ、カヲルとの関わりで心を開きつつあったシンジは再び自己愛的殻のなかに閉じこもってしまう。そこにカヲルが現れる。そして彼と一緒にエヴァに乗ることを提案したが、彼が「希望は残っているよ。」と言った様に、一緒に現実をみていこうと言う提案だったと考えられる。

一方でロンギヌスの槍はキリストの受難に関わる聖遺物であり、崇敬の対象である。その槍を抜くと言うことは奇跡を生み出すきっかけを作ろうと言っているように感じられる。それが人類補完化計画を勧めていくことに必要不可欠なのだろうが、一方で、シンジの自己愛的殻を破り、他責的で迫害的な妄想分裂ポジションの心性から自責的で贖罪を伴う抑うつポジションへの移行をスムーズに行わせようとする彼のシンジへの優しさの様にも感じられる。

カヲルが最後に「今の君に必要なことは何よりも希望。そして贖罪と心の余裕だからね」と言ったのは抑うつポジションの心性を端的にしめしているように感じられる。

これまで散々迫害的な扱いを受けてきたシンジは当然のことながら、エヴァに乗ること（＝現実をみること）を拒絶する。そしてカヲルは拒絶するシンジの首についている DDS チョーカーを外す。これはある意味シンジが抱いてきた強烈な超自我であり、カヲルがそれを外し、自分の首に付け替えたということは、もっと自由に生きていんだよ、これまでの超自我に伴う苦悩は引き受けるよ、というメッセージをシンジに送っているように感じられる。そもそも超自我はある意味、人が社会生活を形成し、維持する上で作り出された心的装置である。その中でシンジはカヲルに心を開き、エヴァに乗ることを決意したものと考えられる。

そのあとカヲルとシンジがエヴァンゲリオン第13号機に乗った後の会話が特徴的である。

シンジ「僕らだけじゃないんだ……」

カヲル「マークナインの事かい？ 援護のためだよ。ヴィレの動きを警戒しているのさ」

シンジ「そんなの、僕らだけで十分だよ」——『綾波じゃないのに』

綾波「綾波じゃ、ない？」

【考察】

なにかシンジはカヲルを良い対象と捉え、その結びつきが強くし他者（ここでは初期ロットの綾波）を排除しようとする心性になっている。それは妄想分裂ポジションの心性であり、今後の展開がカヲルの意図（償い、心の余裕を経て、希望を抱く抑うつポジションへの移行）とは異なった形になることを示唆している様に感じられる。

5) 槍を抜くことに躊躇してしまうカヲルにシンジはどの様に感じたのか

シンジと一緒にエヴァ 13 号機に乗ったカヲルだが、リリスの軀に刺さっている槍の形状が変化していることに気がつき、作戦実行を躊躇う。

そこでのシーン

カヲル「ちょっと待って、変だ」

カヲルは顎に手を当てて何かを考えている。

シンジ「どうしたのカヲル君？」

カヲル「おかしい、二本とも形状が変化して揃っている」

しかし、シンジは先を急ごうとする。

シンジ「早く槍を抜こうよ。そのためにエヴァに乗ってきたんだから……」

突然、背後で爆発が起きる。爆発で生じた衝撃で 13 号機がよろめく。

シンジ「うわっ！」

シンジ「なんだよこれ！？」

襲来してきた機体は赤く、シンジは意外な相手の襲来に気付く。

シンジ「改 2 号機！アスカ！？」

改 2 号機は度重なる攻撃をエヴァ 13 号機に対して行い、どうにか AT フィールドで弾き返す。

シンジ「何すんだよ！アスカ！」

シンジ「何すんだよ！アスカ！」

アスカ「バカシンジ！あんたまさかエヴァに乗ってんの！？」

シンジ「そうだよ、エヴァに乗って、世界を変えるんだ！」

アスカ「ガキが……だったら乗るな！！」

(省略)

シンジ「なんで邪魔するんだアスカ！あれは僕たちの希望の槍なんだよ！？」

アスカ「あんたこそ！余計なこと！するんじゃないわよ！ガキシンジ！またサードインパクトを起こすつもり！？」

シンジ「違う！槍があれば、全部やり直せる。世界が救えるんだ！」

アスカ「……ホントにガキね。…分からず屋！」

(省略)

カヲル「やめようシンジ君。嫌な予感がする」

シンジ「駄目だよカヲル君！何のためにここまで来たんだよ！」

カヲル「もういいんだ。あれは僕らの槍じゃない」

シンジ「僕らの槍じゃないって……槍が必要だって君が言ったんだ。だから僕

は、エヴァに乗ったんだよ！」

13号機は、リリスの大きな体によじ上って槍に近づいていた。シンジは、カヲルの言うことを聞かず、カヲルと繋がっていた機能を断ち切り、独断で目的を果たそうとする。

シンジ「操作系が！」

エヴァの目の光が赤色に変わった。

シンジ「カヲル君のために、みんなのために槍を手に入れる。そうすれば世界は戻る！そうすればミサトさんだって！」

(略)

カヲル「駄目だシンジ君……！」

カヲルは蒼白した顔面でシンジを見た。

アスカ「やめろ！バカガキ！！」

シンジ「うああああああああ！！！」

シンジはリリスの体に突き刺さった大きな槍を引き抜くと、それを頭上にかざして交差させる。シンジは目的をやり遂げたことで、達成感のある表情を見せ

た。

【考察】

愛する対象を失う不安が強まれば強まるほど自我はますます対象を救おうと切望し、修復のタスクが困難であればあるほど、超自我に関連した要求がますます厳格さを帯びる（メラニー・クライン）

→自身で犯した罪や苦悩を受け入れられず、カヲルやアスカの制止を全く聞き入れず、槍を抜いてしまう。それは自身の贖罪の念に耐えきれず、シンジは妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行ができなくなってしまう。そのために妄想分裂ポジションを強化させ、ふたたび周囲を迫害的に捉え、自己愛的殻に閉じこもり、自分しか信じられなくなってしまう。そしてシンジは槍を抜くこと（奇跡を起こそうとすること）ばかりに固執してしまい、それが世界を救う唯一の方法だと信じ込んでしまう。それは万能的な存在（万能空想）になることで、苦しみから逃れようとする心性（躁的防衛）の様に感じられる。これは「破」

最後の綾波を助け出すシーンで見られたような、喪失に伴う抑うつ的感情を自身で受け止めきれず、犯してしまった過ちとなんら変わらず、反復強迫の様にも感じられる。

つまり、シンジはこの時点では、カヲルが提示した「今、大切なこと、何よりも希望。そして贖罪と心の余裕」という思いを歪んだ形で受け止めてしまったのではないだろうか。そして二本の槍の形状の変化（歪み）というものが、そのシンジの認識の歪みの象徴である様にも感じられる。